

50478

教科書文庫

5
810
3A-1948
01304 49583

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

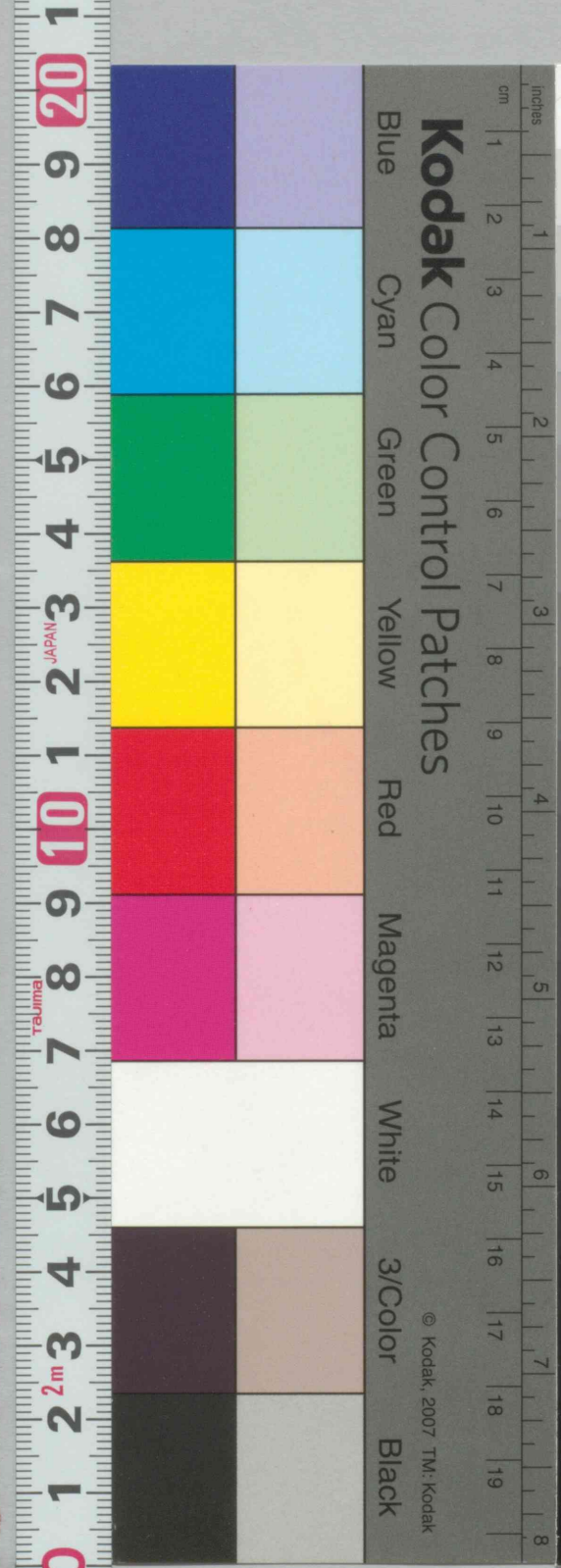


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



國語

第五学年 中



廣島師範学校
蔵書印

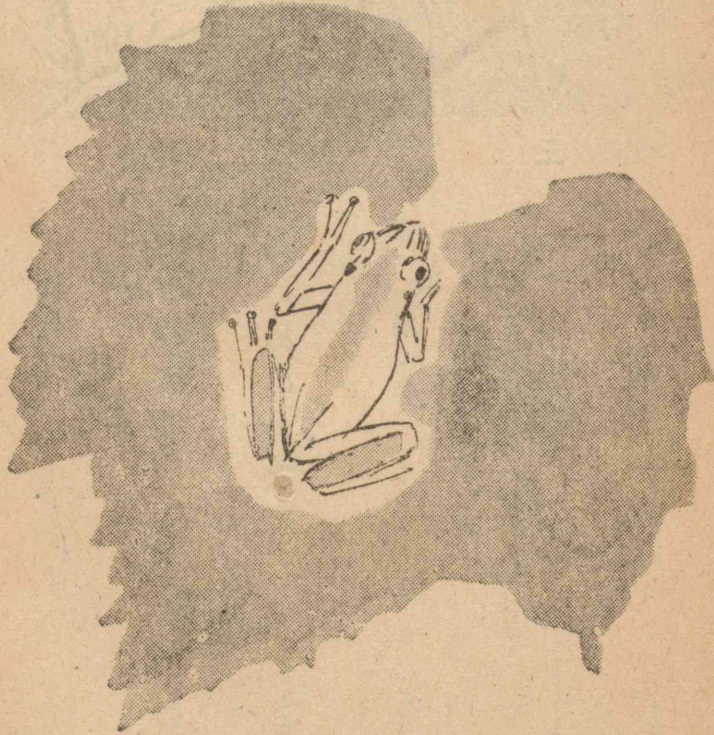
TIA7
IK8
2



中央図書館

國

語

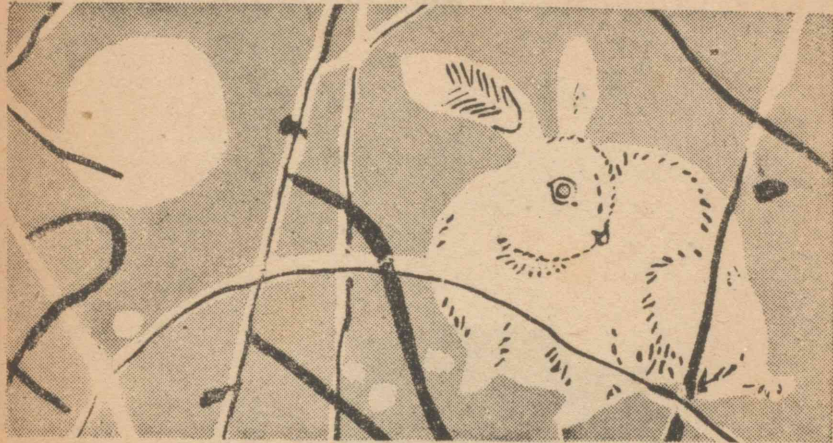


第五学年
中

広島大学図書

0130449583





もくろく

一 川口の子どもたち……………四

二 めいめいの歌……………十二

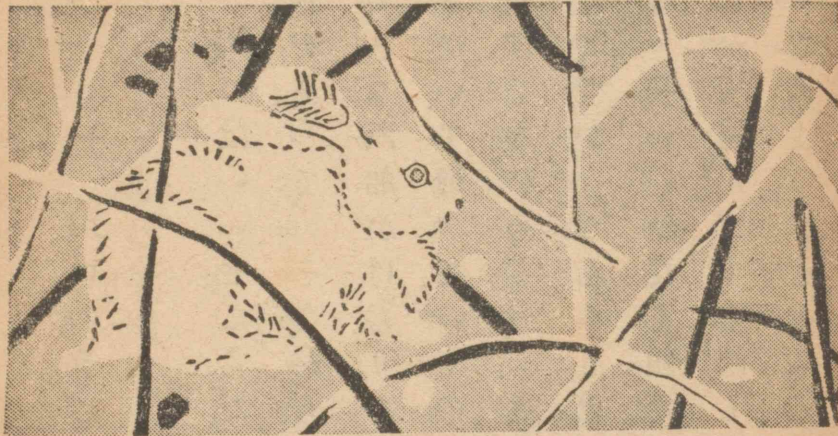
丘の上

唱歌

おかあさま

三 二宮金次郎……………十八

四 田園……………三十



五 新しい出発……………四十三

やりなおし

じゃがいもをつくり

六 雨の中……………五十一

七 一つ一つづろ……………五十五

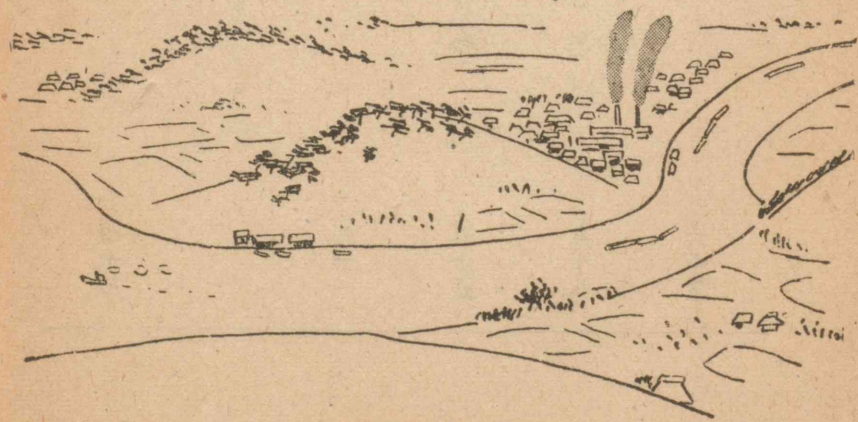
八 いいにくいことば……………五十八

九 父の看病……………六十三

一 川口の子どもたち

川口はいいところだ。近くには小高い丘があつて、そこからおきをながめると、大きな汽船がけむりをはいて、長いかけをひいて通つていくのがみえるし、川上の方をながめると、近くの町の工場のおんとつが、なん本も立っているのがみえる。長いいかだを組んで、材木を遠くから運んでくるのもみえる。

なによりおもしろいのは、大学のボー



トがいつもここで練習していることだ。

川口の子どもたちは、いつも砂原で、すもうをとったり、おにごっこをしたりして遊んでいるが、それにあきると、そのボートをながめては、いろいろな話をしあつて楽しむ。きょうも、みんなは話に花をさかせている。ついせんだつて、大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、まだむちゅうになっているのである。

「ぼくは、大きくなつたら、三ばんか四ばんをこぐんだ。カマかせに、長いオールをぐいぐいとこいでみたいな。」
「ぼくもきみに賛成だ。ぼくは、父にいたら、せいの高いりっぱなからだになるだろう。その体格で、思うぞんぶん、長いオールをこいだら、オールがぎゅうぎゅうとよなつて、船は、

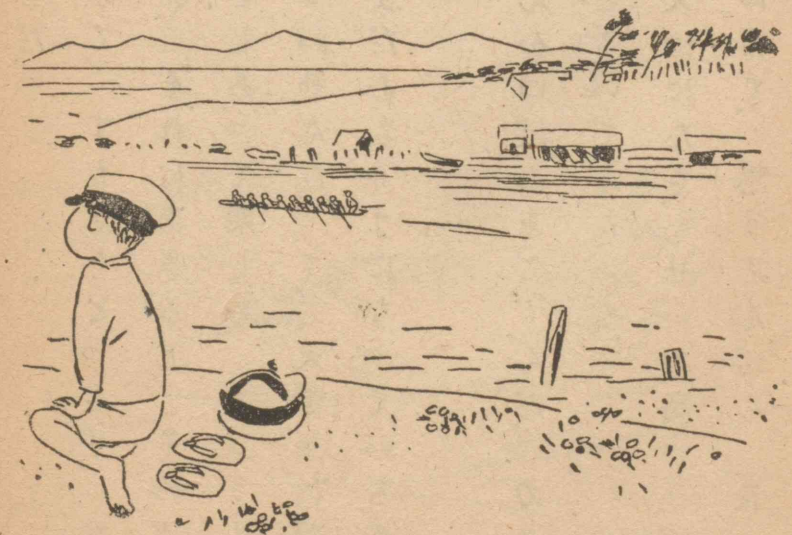
ものすごいスピードで走るだろ
う。みるみるうちにあいてをぬ
いてしまふ。それを思うと、ぼ
くは胸がわくわくする。
『ぼくは、バウがこぎたいな。い
つもは、いちばんびりにいるば
かりで、べつに用もないようだ
が、ボートの向きをかえたりひ
き返そうとしたりするときには、
きつとコックスが大声でいうだ
ろう。』

『バウ、バック一本。』

それでもきこえなければ、また
どなる。

『バウ、バック一本。』

ぼくが力をいれて、一本バック
をやると、ボートは向きをかえ
て、あぶないところからぬけだ
して、新しい方向に進んでいく。
ぼく、これがうれしんだよ。
『ぼくは、こぎかたがじょうずに
なって、みんながさせてくれた
ら、コックスのまえにすわって、
整調をやってみたいな。』ぼくは



からだもいいし、息もつづく。コックスの号令どおりに、一糸みだれずこいでいくと、乗り組んでいる者が、みんなそろって、一つの生きものみたいに進んでいく。これこそ、いちばんりっぱなものだと思う。

「だがね、やっぱり、いちばんだいで、むずかしいのは、コックスだろう。さっきから、きみはだまっているけれど、ぼくはきみをコックスにすいせんする。」

「ほんとうにきみのいうとおりだ。ぼくらですいせんしようよ。きみは、ぼくらの心持をよく知っている。ぼくらのはりきつているとき、ぼくらのつかれているとき、ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかつている。」

ただ、わかつているだけではなしに、いつもそのうえを考えていて、いいことをはつきりきめる。ぼくらは、きみについていきさえすれば、だいじょうぶだと思うんだ。」

「そういわれて、自信をもって、よしやろうということができたら、うれしい。けれども、ぼくにはなかなか、よしきたとはいえない。」

「おきを大きな船が通っていくよ。あれはどこへいく船だろう。」
「大きな船だね。きつと遠くへいくんだらう。」

「あんな大きな船の船長と、コックスと、どっちがむずかしいだらうね。」

「そりゃあ、船長のほうがむずかしいだらう。しかし、りっぱなコックスは、いつかりっぱな船長になるだらうよ。」

「じゃあ、りっぱな整調は、りっぱな運轉をする人になるだろ
うね。」

「では、実力があって、カいっぱいはたらくいい船員には、だ
れがなるのさ。」

「それはぼくたちだ。三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくたち
強い男の子だ。」

「さあというときに、ひとりで責任をしょって立つ、パウをこ
ぐ人もいるだろう。」

「もちろんさ。そういう男には、ぼくがなることにきめている
のさ。」

「船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、また、日本
の國全体だって、同じことだと思う。いいコックスが日本を

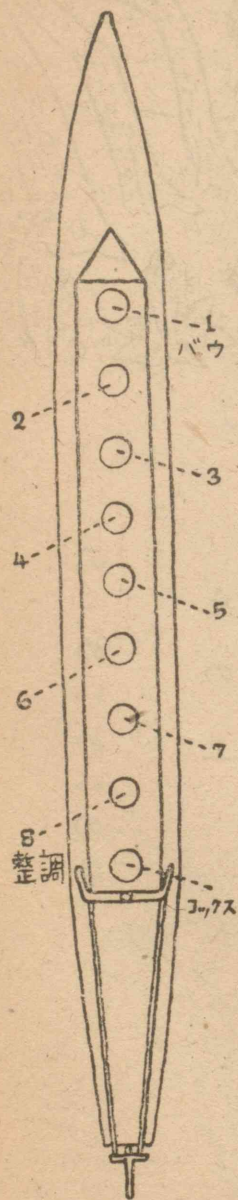
正しい方へつれていくのさ。」

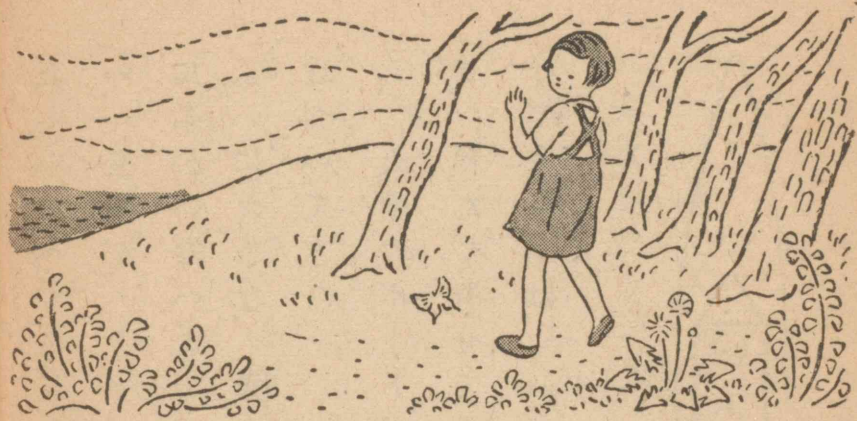
「いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれる
にちがいないよ。」

ふいに大きな、勇ましいかけ声が聞えて、一そらのボートが
近づいてきた。

「あ、大学のボートだ。このあいだのレースで勝ったボートだ
よ。頼んで乗せてもらおう。」

子どもたちは、いっさんにボートの方へかけていった。



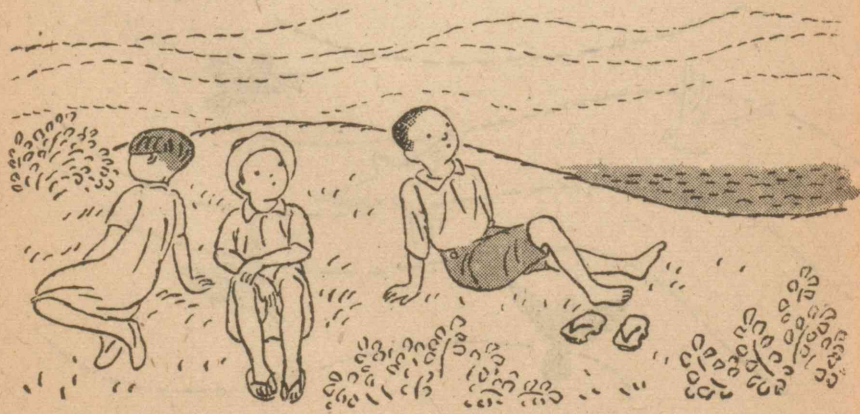


二 めいめいの歌

丘の上

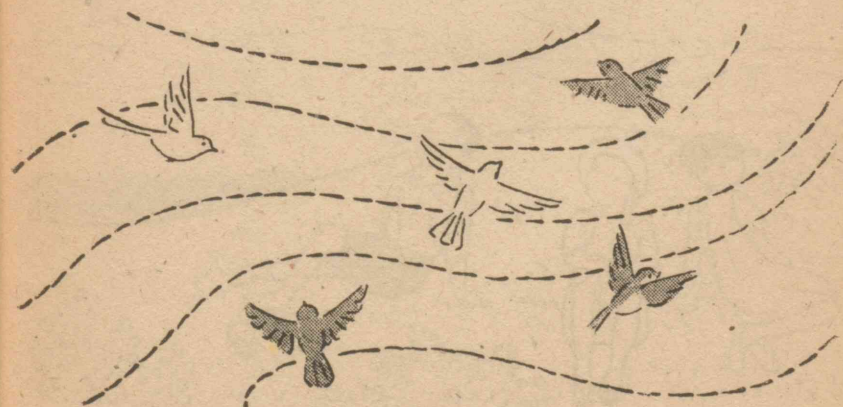
春がさって夏がくる。
 たんぼぼのわた毛が遠くとんでいく日だ。
 あげはのちようが、まつのかけから舞っ
 てでる。
 まつの本では、きようからせみが鳴きは
 じめた。
 まっさおな海は、太陽の下でわらってい
 る。

休みもなく、はてしもなく、ゆるやかに
 にうつ波の声は、
 われわれの心をあらうようにきこえる。
 おりから、港の方でふえが鳴る。
 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。
 ああ、われわれみんな、
 遠い國から旅してきた旅人のような氣
 持のする日だ。
 丘の上の草にすわって、
 いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよ
 う。
 あれは、あわてもののほおじろだ。



あれは、元氣もののこがらだ。
あれは、この村のさみしがりやの小す
ずめだ。
小鳥たちはみんなめいめいの歌を歌う。
一つの太陽の下で、
みんながめいめいの歌を歌っている。
一つの太陽の下で、
せみも鳴き、ちようも舞い、
まっさおな海もわらい、
たんぼぼのわた毛も遠くどんでいく。

唱歌



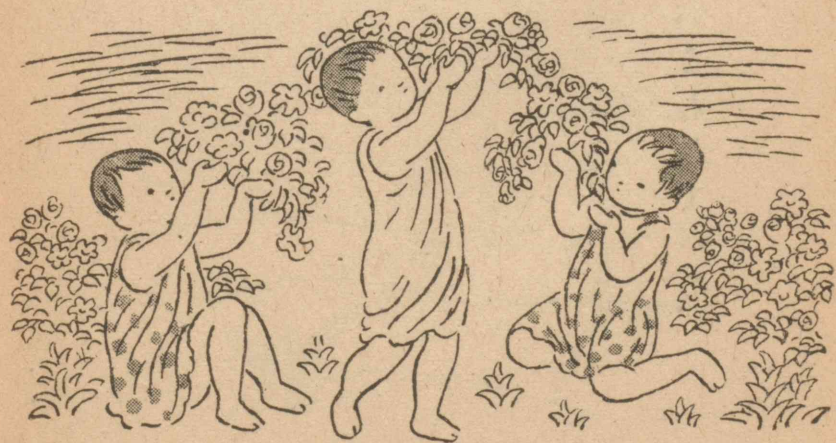
先生がオルガンをおひきになると、
オルガンのキイから、
赤い、
青い、
金色の、
ちがった形の小鳥が、
はばたいてでて、
くるくる、くるくる、
ぼくたちの頭の上を、まわりはじめ。
教室の高いところの窓ガラスが、一まいこわれていて、
やがて、小鳥たちは、
そこから遠い空へにげていった。

おかあさま

人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、

天と地にかがやくものの中で、いちばん清らかな、すみきったたま、それはおかあさまの愛です。

わたしをまもるためには、どんな困難とも戦う、そのうで、ひくく、かぼそい、おさな子のささやきも、



ききもらさない、その耳、わたしのためには、いばらの道をもふみわけたその足、いま、わたしが知っているいいことと、正しいことは、おかあさま、あなたの目から教えられました、おかあさまの胸に、わきあふれるなぐさめの泉に、かなしみもいたみも、あとなくぬぐわれます、朝も、晝も、夜も、

流れやまぬ愛のしみずに、
うるおされ、やしなわれて、
のびていく命のわか葉。

わたしの幸福は、
おかあさまのえ顔から生まれます。

三 二宮金次郎

これから、私の調べた二宮金次郎のことをお話します。

二宮金次郎の生まれたところは、神奈川縣のかやま村といつて、さかわ川にそつた村です。

この村に、ぎんえもんという人がいました。働くことがすきで、一代でりっぱな身代をこしらえました。

その子どもに、りえもんという人がありましたが、たいへん情ぶかい人でした。村の人たちが困って頼みにくると、氣持よく、物をわけてやったり、お金をかしてやったりしました。この人が金次郎の父親でした。

りえもんは、からだがよわくて、よく働けませんでした。そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、いつのまにかびんぼうになって、その日のくらしにも困るようになりました。しかし、りえもんは、なんとかして、

からだをじょうぶにして、身代をもとのようにしたいものだ、と、ほねをおつていました。

そういうときに、金次郎が生まれてきたのです。だから、金

次郎は、子どものとき

から、家の手つたいを

してよく働きました。

また、父親のすきなも

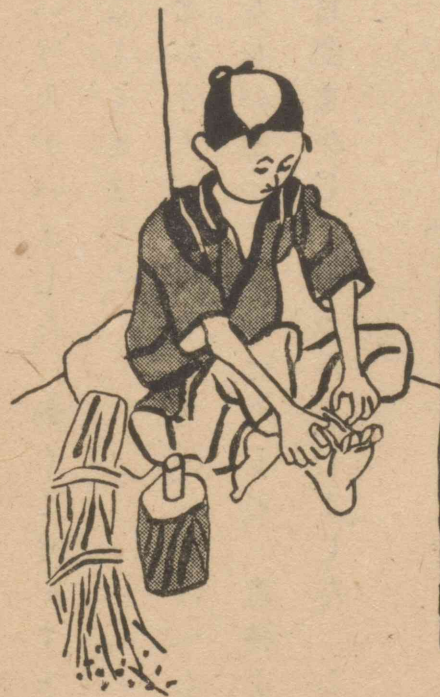
のを買うために、自分

でわらじを作つて、お

金をもうけたりもしま

した。

金次郎が十二のころです。さかわ川のていぼう工事があつて、



どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつでて働くことになりました。

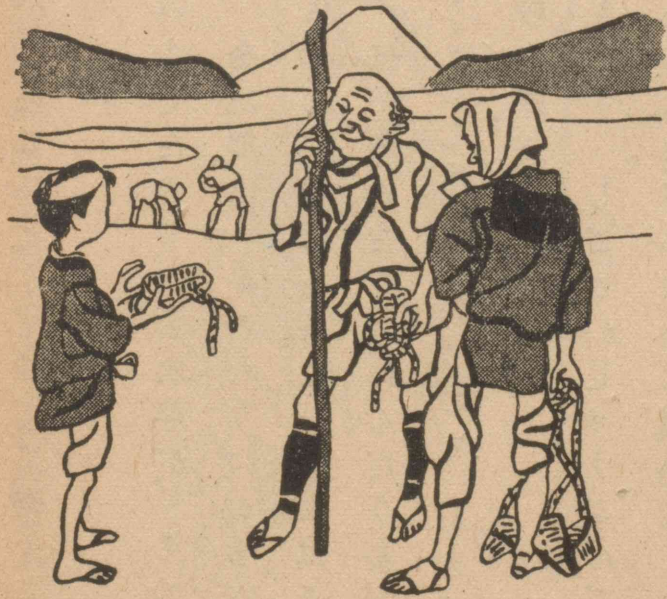
そのとき、父親が病氣でねていましたので、金次郎が、そのかわりにでることになりました。金次郎は、年のわりにからだが大きかったし、働きつけているので、役にたたないことはありませんでした。それどころか、ほかの人たちは休んだりむだ話をしていのに、金次郎は、すこしも休まず働くので、かえつて、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

しかし、なんどいっても子どもです。しごとがじゆうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思ひました。そこで、金次郎はいいことを考えつききました。

毎晩、家に帰つてくると、晝まの働きでつかれきつていなが

ら、わらをたたいてわらじを作ることにしました。これを持って、朝早く工事場へいきました。たくさんの人の中には、わらじの切れている人もあります。金次郎はわらじをさしだしていいました。

「おじさん、これをはいてください。わたしがみなさんのお役にたたないで、すみません。どうかそのかわりにはいてください。」
おとなの人たちはおどろいて、すぐには受けてくれませ



んでしたが、おしまいには、喜んではいてくれました。

金次郎が十四のとき、父親がなくなりました。金次郎の下にふたりの弟がありました。いちばん下のは、そのとき二つでした。どんなに病気がちでも、父親の生きているあいだは、みんなはげましあって、どうにかこうにか切りぬけてきましたがいまはどうにもなりません。

母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらってもらいました。

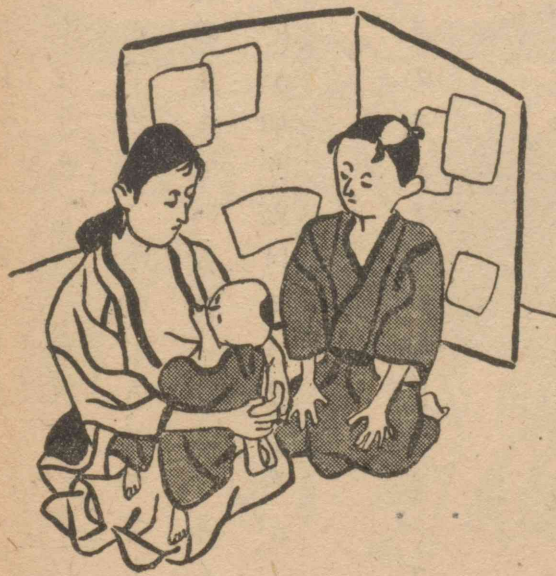
「ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅうぶん働けますよ。元氣よくいった母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついてねむれません。」
「どうしたのです。おかあさん。」

「おちちがはって困るの。二三日したらなおると思うけれど。」
「おかあさん、とみちゃんを返してもらいましょう。ひとりぐ
らい育てるお金は、わたしが山へいって木を切ってきてもう
けますよ。」

金次郎は、自分の考えをくり返して話して、母親にすすめました。

「そんなら、今夜いって、返してもらってきましょう。」

母親は、金次郎が、「もうおそいから。」というのに、その晩のうちについて、子どもをつれてきました。そうして、



「どんなことがあっても、親子四人、わかれないようにしまし
うね。」

といいあいました。

そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうち
からおきて、遠い山へいって、しばをかったり木を切ったりし
て、村の人に買ってもらいました。そのお金は多くはありません
んでしたが、四人が生きていくにはじゅうぶんでした。

夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしまし
た。ふつうの子どもだったら、くたくたになつたおれるところを、
金次郎は、すこしもつかれたようすもなく、かえって、
その体格もりっぱになつていきました。

金次郎は、一さつの本をみつけました。それは「大学」といって、

かん文
で書い
たむず
かしい
本でし
た。そ

の一まいめをめぐって、くり返しくり返し読んでみると、りっばな人になるためには、学問をしなくてはならないと書いてありました。

金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりしました。まきをとりに山へいく、そのいき帰りに、いつもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読みながら歩きました。

「あの子は、どうかして、いるのではないだろうか。」

村の人たちは、こう、うわさをしましたが、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。

お正月がくると、例年のことで、だいかぐらがまわってきました。たいこをたたいて、家から家へやってきます。どこの家でも、百文だして、おもしろい舞を舞わせましたが、舞わせない家でも、十二文あたえるのがならわしでした。金次郎のうちでは、その十二文さえありませんでした。けれども、そんなわずかな金がないということはいえませんが、母親と相談して、戸をしめきって、息をころして、だれもいないふうをしていました。金次郎のうちは、こんなにもびんぼうでした。



ところで、そのつぎの年、母親が、四五日の病氣で死んでしまいました。おまけに、さかわ川がまたあふれて、のこつていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。このとき、金次郎はたった十六でした。

そこで、ふたりの弟は母親のさとに、金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。

いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、そこへいってからは、いよいよいっしょうけんめいに働きました。そのうえ、夜おそくこつそりと勉強を続けました。

夜の勉強には油がいります。その油を自分でとりたいと思ひ、となりのおばさんから一にぎりのあぶらな種をかりて、かわらへいって、あき地にまいておきました。あくる年の春、黄色

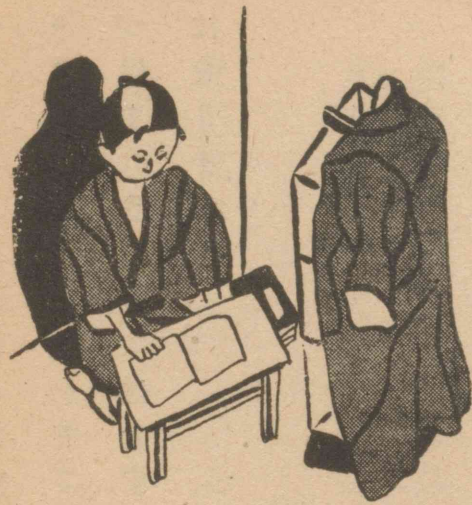
い花がさいて、たくさんの実がつけました。これを油にかえて、本を読み続けました。

金次郎は、また、人がすてておいたいねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。すると、秋の

終りには、一びょうあまりの米を自分のものにするのができました。

この一びょうをもとにして、困っている人にかしてやったり、植えるところをふやしていったりするうちに、三年めには、二十びょうの米をとることができました。

やがて、金次郎は、親類の家から



でて、もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすことが
きました。そればかりではありません。いろいろのことを身に
つけて、やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるよう
になりました。

四 田 園

春

紅梅・白梅みなちりはてて、
ひがんすぎれば風あたたかく、

木々のつぼみも草のめも、
日々に色づきふとりだす。

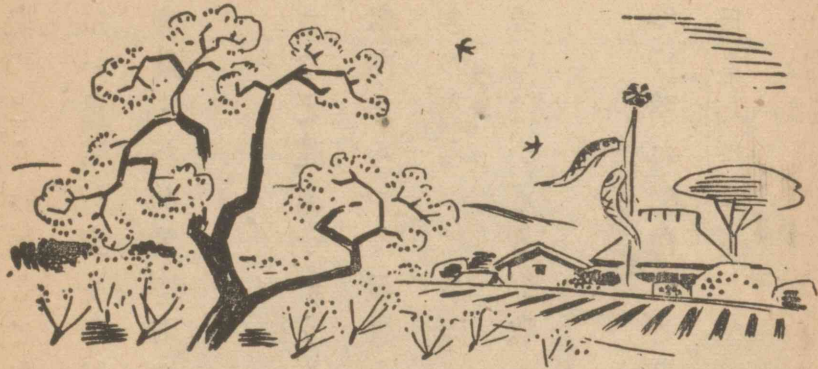
続くひよりにさくらがさいて、
野山をかざると、もも赤く
畑にさいて、れんぎょうは、
かきねを黄色にそめていく。

青い空にはかすみがかめて、
ひばりは朝から大うかれ。
えんどう・そらまめみな花つけて、
羽音高くみつばちがとぶ。

しとしとと降る春雨に、
やぶのたけのこすくすくのびて、
しずくすおうとでてむしが、
つのをふりあげのぼりだす。

岸のやなぎのほわたがとんで、
麦のはしりほかがやく上を、
海こえてきたつばくろが、
すうい、すういとびまわる。

げんげがさいて、
なの花ちって、



かきのわか葉に日の照るころは、
矢車からからこいのぼり、
村のわら屋の庭に立つ。

短か夜しらむを待ちかねて、
だいこんの花にあかつきの
色ただよえば勇ましく、
すき・くわ持って野にいそぐ。

夏

ほたる追う夜も重なって、

麦のとりいれことなくすめば、
はい色雲が空うちおおい、
青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

さなえ運ぶ子、うし追うおきな、
家内そろって田植えする。
きのうの畑は水田となって、
晩にはかえるが歌いだす。

つゆ晴れ空はみどりにすんで、
日ましに日ざしが強くなり、
いねはそだつし、あぜまめのびて、



ふくすず風に夕はん樂し。
空にくずれる雲のみね、
庭にかがやくひまわりの花、
あぶらぜみの声さわがしく、
晝の休みもあせがでる。

まばゆく光るいなずまに、
続いてひびくらの音、
たきと落ちくる大ゆうだちに、
いまの暑さはどこへやら。

くわをかついで田をみまわれれば、
日はまた照って水たつぷりと、
いねのかぶばりこのうえもなく、
秋のみのりも思われる。

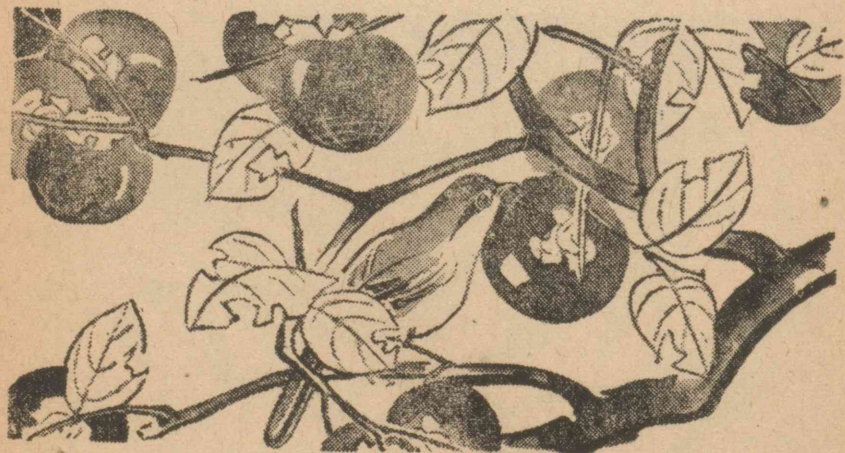
ひと日のあせもおさまって、
夕風ふけばたいこ鳴り、
清い歌声あちこちと、
こよい楽しいぼんおどり。

秋

はぎの花ふく朝風も、
音さえすずしくなってきた。
さやまめ・とうきびよくみのり
いももふとつてくるようす。

あまがき・しぶがき赤くなり、
くりもばらばら落ちだした。
こずえをかけるもずの音も、
すむ秋空によくひびく。

あぜに火とさくまんじゆしゃげ
庭にもえたつはげいとう。



続くひよりに勇みたち、
いねもことなくとりいれた。

きょうはうれしい豊年まつり。

村道に立つ大のぼり、

ゆききの人もえ顔して、

その足どりもいそいそと。

かきねににおうきんもくせい、

しとしとと降る秋雨に、

ちれば山にはまつたけが、

かおりも高くはえてくる。

かえてにうるし、はじめの葉も、

赤く黄色く色づいて、

冬のしたくをとりいそぐ

村人の目をなぐさめる。

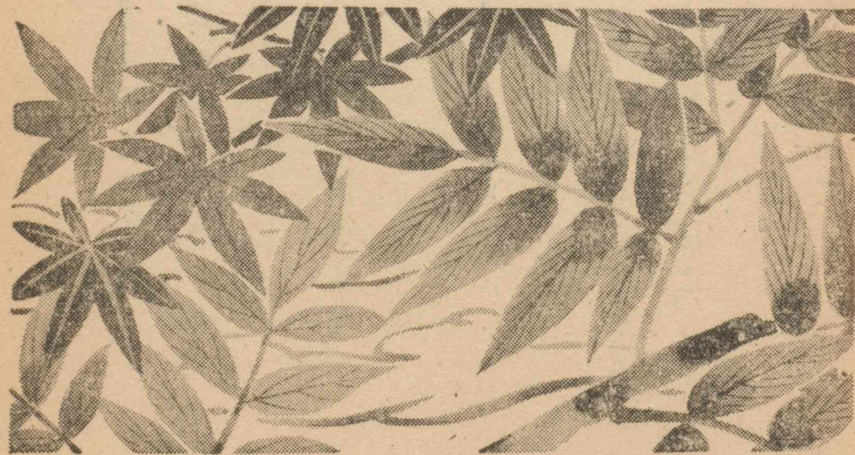
おおもむぎ・こむぎの種まきすんで、

そらまめ・えんどうみなまいた。

冬の用意もしだいに進み、

あとはもみすりするばかり。

冬





山のもみじ葉みなちりはてて、
青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。
夕ぐれ寒くふくこがらしは、
黄色くかれたくぬぎ葉鳴らす。

南にかたむく日につれて、
光はまともにえんにさす。
ほしたかぼちゃは赤やら黄やら、
にわとりどもはひなたぼこ。

はい色雲がたちこめて、

さとはしぐれがしとしと降るに、

ふもとの小屋はみぞれして、

うらの山には白雪つもる。

もちつきすませて、しめなわをはり、

一夜明ければうれしいはつ日。

廣場につどうたおとなりどうし、

え顔にはころびあいさつをする。

池にむすぶはうすごおり、

庭に立ったはしも柱。

学校へいそぐ子どもらの。

息はま白に舞いのぼる。

よべの大雪まだ降りやまぬ。

もうそうちくも重荷にたえず、

つばきの上にぼたぼた落す。

ことしも作はよいだろう。

ふきのとうでて、すいせんにおい、

うめもほころび、こちふけば、

春も目さきに近づいた。

どれ植えつけの用意をしよう。



五 新しい出発

やりなおし

ようち園の卒業式がありました。

弟が卒業するので、私が、母にかわっててました。

正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびん
がかざってありました。

ようち園の子どもたちは、そのまえにおとなしくこしかけて
います。

園長さんが、だんの上にお立ちになりました。

女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。

「はい」「はい」「はい」

みんな元氣のいい返事をして立ちます。それをみようど、父兄の人たちは、自分の席で立ちあがりま
す。子どもと父兄と、いっしょに呼ばれているようです。

みんな読みあげられてから、おめんじょうをいただくことにな
りました。

総代の名が、ひときわ高く呼ばれました。弟の名でした。

私は、自分が呼ばれたような気がしました。

弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進みました。

そうして、園長さんのまえに向いたとき、

「あ、まちがった」

と、大声でいいました。

弟は、さっさともとの自分の席にもどり、そこからでなおし
て進みました。

こんどはまちがいませんでした。

園長さんのまえにでて、だんをあがり、

両手をずっとさしのべて、おめんじょうをいただいたいて、

ささげ持つようにしながら、席に着きました。

私はほっとしました。

そうして、弟の心持を頼もしく思いました。

すこしぐらいのことだからといって、ごまかさなかつた弟よ、
大ぜいの目のまえで、

「あ、まちがった。
とさけんだ弟よ。
まちがったとき、思いきってやりなおした、その勇気を頼も
しく思いました。」

じゃがいもをつくりに

じゃがいもをみると、ぼくは、北海道のいな
かを思いたす。

みわたすかぎりのじゃがいも畑のうねの向こ
うに、

いつもぼっかりとういていたえぞ富士。

あの山のすがたが、小さいころのことを、い



ろいろと思いたさせる。

ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたのは、

ぼくの二年生のときだった。

津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、

ぼくは、船のかんぱんに、おかあさんとふたりで立っていた。

北海道の家には、うしが四頭いた。

みんなちちうして、ぼくによくなれていた。

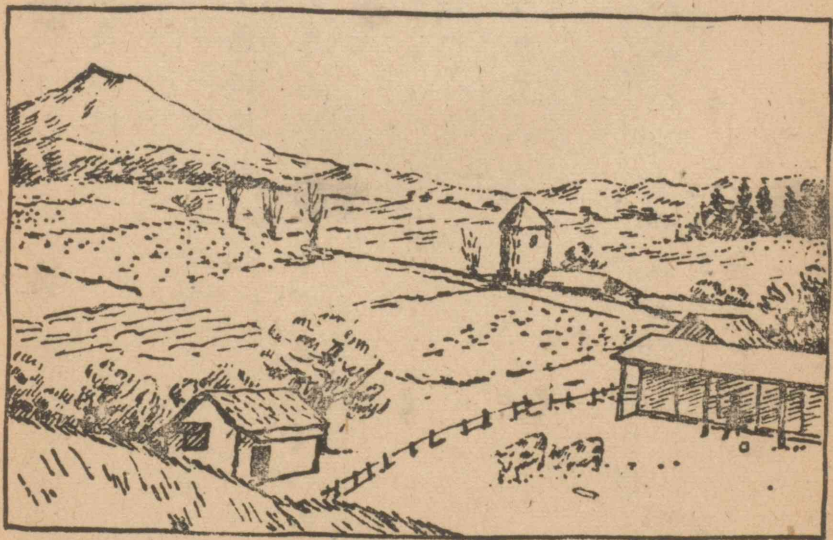
うちではバターもつくったし、

こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。

おかあさんがパンをやくそばで、

ぼくは、いつも本を読んでいた。

ぼくのいすは、小さなゆりいす
 で、
 その下に、いつもかいねこのメ
 リーがいた。
 アカシヤの花が風にゆれ、
 畑では、いちごがでさかりだっ
 た。
 おとうさん、
 ぼくは、大きくなったら、また
 おかあさんといっしょに北海道
 へいきます。

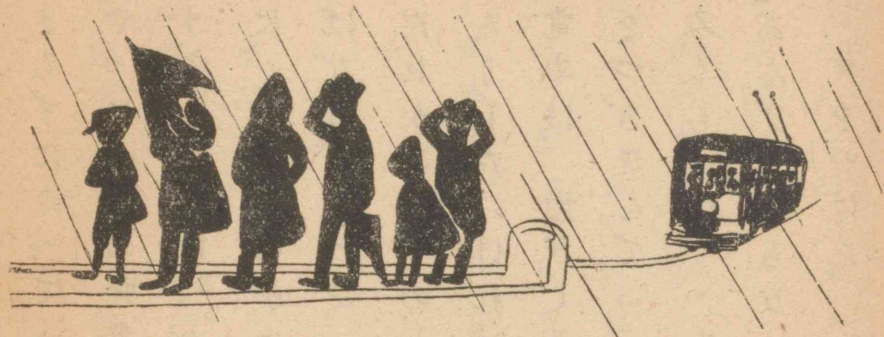


北海道へ行って、じゃがいもをつくります。
 それから、えんばくもつくります。
 ぼくは、おとうさんと同じように、ちちうしをかって、
 自分でバターをつくります。



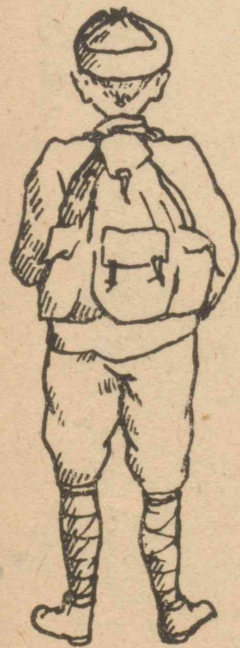
日本のこくぐらは、北海道だといひます。

やぎもかいます。
 やぎ小屋のまわりには、お
 かあさんのおすきなライラッ
 クを植えましょう。
 おとうさんに、負けな
 ように働きます。



ゆうべからの大あらしは、けさになって
 もまだ続いていて、庭のあさがおの花は、
 みんなふきちぎられ、へちまの葉は、みん
 な下向きになってしまった。
 私は、かさをさして電車の停留所までで
 かけた。しかし、風がはげしいので、すぐ
 かさをつぼめてしまった。雨にうたれなが
 ら、電車のくるのを待っていた。電車は、
 くるにはくるが、みな満員の札をさげて、

六 雨の中



さっぼろに農学校をつくられたクラーク先生もおっしやった。
 「青年よ、大きな望みをもて。」
 ぼくは、大きくなったら、どうしても北海道へいこうと思う。
 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。
 おかあさんをおつれして。
 デンマルクの農業のことを勉強して、
 ぼくは、いい農夫になろう。

とまらずに走って行ってしまふ。

やっと一台の電車がとまった。あふれそうな乗客にまじって、どうやら乗車口へもぐりこむことができた。車内はむしろ暑い。えに、おたがいがぬれたからだ。おしたりおされたりしなければならなかった。

だれかのかさのしずくが、私のくつの上にぼたぼたと落ちてきたりした。けれども、その足も動かすことはできなかつた。

電車は、歯ぎしりでもするようになり、車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。一停留所ごとに、おりる人と乗る人ともみくちやになつた。しゃしようさんは、

「あんまり乗らないでください、満員ですから。」と、声をかけた。

「そんなにぶらさがっちゃ、電車は動けませんよ。」

とさげんだ。

大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。乗客はおたがいにおしあつて、しゃしよう台までいっばいになつてしまつた。そのとき、しゃしようさんは、

「電車もなみだをこぼしています。そんなにおさないでください。」

い。

といつた。

そのことばをきいて、そこらの乗客は思わずほおえんだ。いまままで、ひどくとげとげした心でおしあつていた人たちも、きゆうになごやかな氣持になつた。

このごろ、電車の中に、つぎのようなひょう語がかかけられて
いるのをみた。

「入口ふさがず乗ったら中へ。」

「え顔の入口、感謝の出口。」

「つり皮あけずに中ほどへ。」

「おたがいに つめて、座席にもうひとり。」

「ゆずられたときの氣持でゆずりましょう。」

どれもみなうまいことばだ。けれども、私は、「電車もなみだ
をこぼしてあります。」といった、しゃしゅうさんのことばをわす
れることができない。

七 一つ一つづる

ことばははねる、

つまめばにげる、

てんとうむしのように、

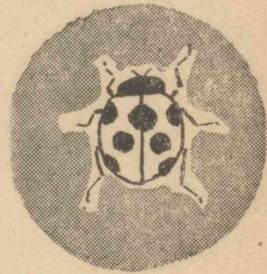
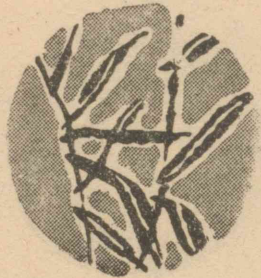
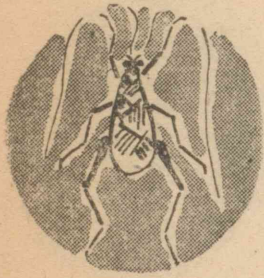
みずすましのように、

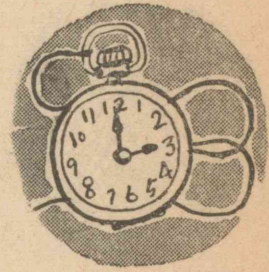
一つ一つはねる。

ことばはひびく、

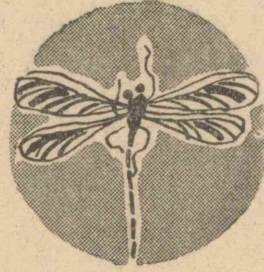
あしの葉のふえよ、

すずむし、小むし、





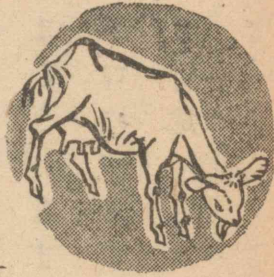
チツクタツク時計、
一つ一つひびく。



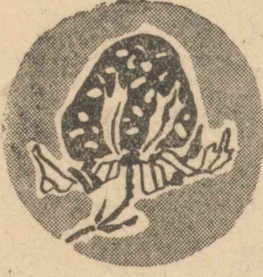
ことばは光る、
プリズムのかけよ、
花火やほたる、
とんぼの目だま、
一つ一つ光る。



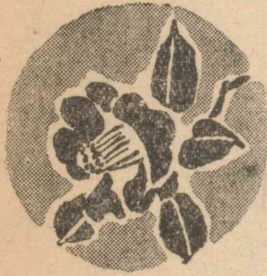
ことばはかおる、
べにばら野ばら、
さんしよの木のめ、



めやぎのおちち、
一つ一つかおる。



ことばはしみる、
はちみつやいちご、
青うめ・わさび、
にがい、にがいくすり、
一つ一つしみる。



ことばをつづる、
じゆずだま・むくろんじ、
赤い、赤いつばき、

げんげの花わ、
一つ一つつづろ。

ハ いいにくいことば

「ナナムギ、ナガゴメ、ナガタマゴ。」
「ナナムギ、ナマモメ、ナマタマゴ。」

いくどもくり返しているうちに、太郎は、
「なまむぎ、なまごめ、なまたまご。」

と、早口にすらすらといえるようになった。

太郎は得意になって、

「おとうさん、こんないにくいことばは、

ほかにないでしょう。」

というど、父はにこにこわらいながら、

「おとうさんは、もつといいにくいことばを知っているよ。」
と答えた。

「なんということばですか。」

「はい」ということばと、「いいえ」ということばだ。

「はい」「いいえ」、やさしいことばではありませんか。」

「やさしいようだが、なかなかいいにくいことばだよ。」

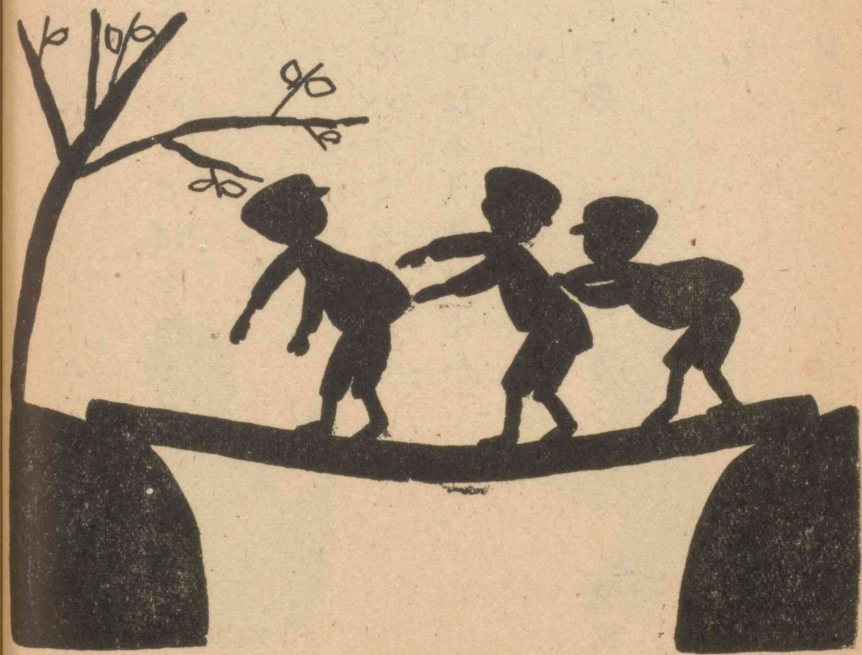
あくる日、太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれで、学校
から帰るときのことであった。

「本道は遠いから、近道をしよう。」

と、正男がいうと、一雄はすぐ賛成した。その近道というのは、



田のあぜ道で、とちゅうに、
かなり深い小川にかけ渡した
一本橋がある。太郎は、まえ
から父に、「あの橋はあぶない
から、けっして渡ってはいけ
ない。」とかたくとめられてい
たのである。が、いま、友だ
ちからすすめられて、ことわ
りかねてしまった。そうして、
いっしょにその一本橋を渡り
だした。すると、橋はまん中
からおれて、三人は、川の中



へドブんと落ちこんだ。さいわい近くの田で働いていた村の人
たちに助けられて、みんな、ぬれねずみのようになって家に帰っ
た。

父は、

「おまえはどうしたのだ。まえからあぶないといっておいた、

あの橋を渡ったのではないかね。」

とたずねた。しかし、太郎はだまっていた。

その夜、また父にきびしくただされて、太郎は、やっときよ
うのことを、ありのままにうちあげた。

父は、

「なぜ、そのとき、『ぼくは、とめられているから渡らない。』と、
きっぱりことわらなかつたのか。」

とせめた。

「はじめ、ぼくがことわると、よわ虫だといってわらうのです。ぼくはくやしくなったので、なに、このくらいのことがかわいものかと、自分からさきになって渡ってしまったのです。」
「なるほど、よわ虫だ。人のいうことに『いいえ』といいきるには、ほんとうの勇氣がゐる。おまえのようなよわ虫には、ひよつとすると命を失うようなあぶないときでも、いいたすことのできないほど、『いいえ』ということばはいいにくいのだ。それから、また、このことをたずねたとき、なぜすなおに『はい』といわなかったのだね。」

「なんだか氣まわりがわるくて、そういうえなかつたのです。」
「それ、ごらん。『はい』も『いい』にくいことばではないか。」

九 父の看病

(一)



雨の降っている三月のある朝、いなかの人らしいひとりの少年が、どろまみれにぐっしりどぬれて、わきの下に着物の包みをかかえながら、ナポリの大きな病院の門ばんのまえへ行って、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、考えぶかそうな目をしていました。

少年は、ナポリの近くにある村からきたのでした。少年の父親といふのは、去年、しごとをさがしにフランスへいったので

すが、数日まえ、イタリアへ帰ってきて、ナポリに上陸しました。ところが、にわかには病氣にかかって入院したので、家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。母親は、その知らせをみるとがっかりしましたが、自分はちのみ子もあつて、家をあけることができなないので、長男にいくらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのでした。



門ばんは、その手紙をひと目みてから、看護人呼んで、少年をその父親のところへつれていくようにといたしました。

「おとうさんの名はなんというの。」
と、看護人がききました。

少年は、もしやわるい知らせをききはしまいかと、おそろしさにあふるえながら、その名をいいました。しかし看護人は、そういう名を思ひだせませんでした。

「年よりのでかせぎ人ですか、外國から帰ってきた——」
と、看護人がききました。

「そうです。でかせぎ人です。」
と、少年は、ますます不安をおぼえながら答えました。

「そんなに年よりではないのですが、外國から帰ってきたので

す。

「いつ入院したのですか。」

「五日ほどまえだと思えます。」

看護人は、しばらく考えていました。が、「ふと思いだしたように、」

「じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベッドだ。」

「いいました。」

「たいへんわるいのでしょうか。どうなんでしょうか。」

少年は心配そうにききました。

看護人は、少年をながめて、それには答えないうで、ただ、

「わたしについておいて。」

といっただけでした。

ふたりは、はしごだんをのぼって、長いらうかのはずれまで

歩いていきました。そうして、大

きなへやの、開いたドアのまえま

できますと、その中にはベッドが二

列にならんでいました。

「おいて。」

と、看護人は、くり返しながら、

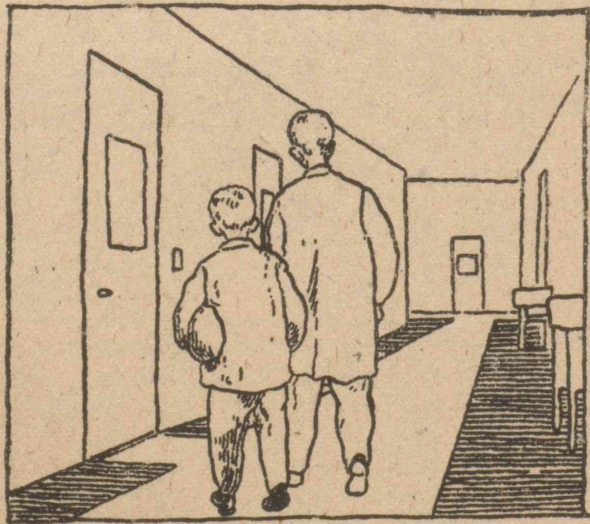
中へはいりました。

少年は、勇気をふるいおこして、

その後からついていきながら、お

どおどした目を右に左に向けて、青ざめた、やせこけた顔をし

ている病人たちをみまわしました。



中には、死人のようにみえる者もあれば、びっくりでもしたように、大きくみ開いた目をあけて、じっと空間をみつめている者もありました。また、子どものようにうなっている者もありました。大きなへやはうす暗く、あたりにははげしいくすりのにおいがただよっていました。看護婦がふたり、手にくすりびんを持って、へやを歩きまわっていました。

その大きなへやはしまでいくと、看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、カーテンをあけて、

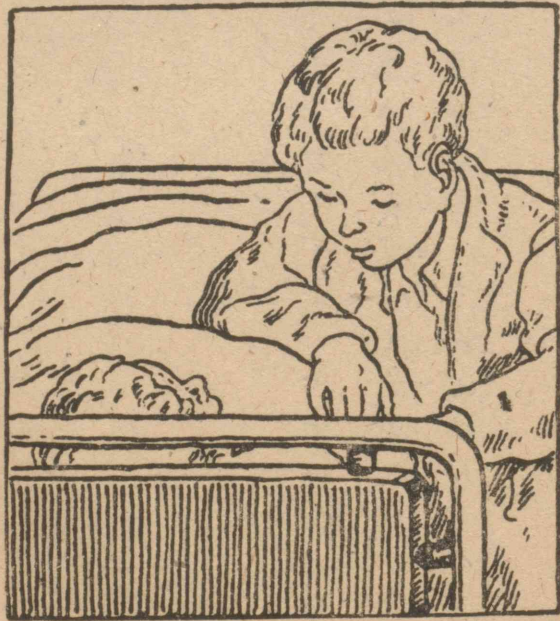
「これが、きみのおとうさんですよ。」

といました。

(二)

少年は包みを下におくと、頭を病人のかたのところへさげて、一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる。うでをつかみました。病人は動きませんでした。

少年は、身をおこして父親の方をみました。すると、かなしくなつてなきだしました。病人はしげしげと少年をみつめて、いくらかわかつたようでした。くちびるは動きませんでした。こうもかわればかわるものか——これが父親であるろうとは、とても思われませんでした。かみの毛は白くなり、



ひげはのび、顔ははれあがってどんより赤く、ひふははち切れ
そうになっていました。ただ、ひたいと弓形をしたまゆどのほ
かには、どこどといって父親らしいところはありませんでした。
息をつくのもやっこのようでした。

「おとうさん、おとうさん。」
と、少年はいいました。

「ぼくですよ。わかりませんか。チチロですよ。チチロがいな
かからでてきたんですよ。おかあさんがよこしたんです。よ
くみてください。ぼくがわかりませんか。なんとかひとこと
いってください。」

けれども、病人は、いっしんに少年をみつめたあとで、目を
閉じました。

「おとうさん、おとうさん。いったい、どうしたんですか。ぼ
くは、おとうさんの子どもですよ。おとうさんの子どものチ
チロですよ。」

病人は、身動きもしないで、苦しそうに息を続けていました。
少年は、いすをひきよせて、目を父親の顔からはなさないで、
こしをおろして待っていました。

「いまに、お医者さんがみにきてくださるだろう。」
と、少年は考えました。

「そうすれば、おとうさんのようすもなんとかわかるだろう。」
少年は、かなしい思いにしずみながら、やさしい父親のこと
をいろいろと思い返していました。

去年、みおくって、最後に船の上でわかれを告げたこ

とや、家族の者が、その旅に楽しい希望をかけていたことや、手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど——それからそれへと、いろいろ考えました。そのとき、少年は、かるい手がふとかたにさわったので、びっくりしてとびあがりしました。それは看護婦でした。

「ぼくの父はどうしたんでしよう。」

と、少年は口早にききました。

「このかた、あなたのおとうさんですか。」

と、看護婦はやさしくいいました。

「そうです。それでぼくがきたのですが、どこがわるいのでしよう。」

「心配しないでいらっしやい。先生が、いまじきにおいてにな

りますからね。」

看護婦は、ほかにはなんにもいわずにいってしまいました。

半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしにはいつてきました。さっきの看護婦と、もうひとりの看護人どがついていました。

その人たちは、しんさつをはじめて、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。待っているそのあいだが、少年にはたはいへん長く思われました。医者がすぐそばのベッドまできました。医者は、せいの高い、すこしかがんだ、まじめな顔をした老人でした。医者が、まだとなりのベッドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。

医者は少年をみました。

「このかたは、この病人のむすこさんです。きょう、いなかからきたのでございます。」

と、看護婦がいました。

医者は、手を少年のかたにか
けました。それから、病人の上
にかがんで、みやくをみたり、
ひたいにさわってみたりして、
そうして、二こと三こと看護婦
にたずねました。

「べつにかわりはございません。」

と、看護婦は答えました。すると、医者はちよつと考えてから、



こういいました。

「いままでどおりのであてを続けなさい。」

そのとき、少年は、勇氣をふるいおこしてたずねました。

「ぼくの父はどうしたのでしよう。」

「心配しないでおいで。」

と、医者は、もう一ど少年のかたに手をかけながら答えました。
「たんどくが顔にでたのです。だいぶんわるいけれど、まだ望
みがある。氣をつけておあげなさい。きみがいれば、きつと
よくなるから。」

「けれど、ぼくってことがわからないんです。」

「どうかよくしたいものだ。力をおとさずにいるがいいよ。」

少年は、もつとなにかききたかったが、いえませんでした。

医者はいつてしまいました。そこで、少年は看病にかかりました。が、ほかになにといつてすることもできませんでしたから、病人のふとんをなおしたり、ときどきその手にさわってみたり、はいを追ったり、うなるたびごとにかがんでみたり、そうして、看護婦がなにか飲み物を持ってくると、コップなりさじなりをその手から取つて、看護婦にかわつてそれを飲ませたりしました。病人は、ときどき少年の方をみましたが、わかつたようなようすはしませんでした。でも、ハンカチを目にあてているときには、じつとみつめていました。こうして第一日はすぎました。

夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。

そうして、朝になると、また看病をはじめました。その日は、病人の目つきが、いくらかわかりかけてもしたようにみえました。少年のいたわるような声のひびきをきくと、感謝するような色が、そのひとみに、ちよつとのあいだうかぶようにみえました。そうして、なにかいおうとでもするようになり、すこしくちびるを動かしました。

ちよいちよいとねむつたあとでは、目を開いたときに、その小さな看護人をさがすようにみえました。医者は二どきてみて、いくらかよくなったように思うといいました。夕がた、コップを病人の口もとにつけたときに、少年はそのふくれあがった顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのをみたような気がしました。そこで、少年は、自分をなぐさめて望みをかけ

はじめました。少なくとも、いくらかわかるであろうと思うと、いろいろのことを——母親のことや、妹たちのことや、父親の帰りを待ちこがれていたことなどを——それからそれへと長々と話しかけて、そうして、あたたかい愛情のこもったことばで、しつかりするようにと病人をはげましました。たとえわからなかつたとしても、病人がなんだかうれしそうにその話す声に——愛情とかなしみとのまじりあつた、しみじみとしたそのちやうしに、じつと耳をかたむけてゐるようにはみえたからです。

そうして、二日めも、三日めも、四日めもすぎました。すこしよくなるかと思えば、思いがけなくまたわるくなつたりで、少年は看病にいつしやうけんめいになつてゐました。一日に二ど、看護婦が持つてきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、ほとんどたべませんでした。

少年は、父親のちよつとしたため息にも、ちよつとした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、心を休めるような希望と、胸をこおらせるような失望とのあいだで、たえずはらはらしてゐました。

ところが、五日めに、病人はにわかになるくなりました。医者は、まったくだめだといわんばかりに頭をふりました。少年は、いすにぐつたりと身を落して、すすりなきしました。



少年は、いすにぐつたりと身を落して、すすりなきしました。が、ただ一つ、少年をなぐさめ

ることがありました。それは、ようだいがわるくなつたにもか
かわらず、病人が、しだいに、すこしずつものがわかりかける
ようにみえたことです。病人は、だんだんすっかりした目を少
年の上にすえて、うれしそうな顔を顔にうかべながら、飲み物
やくすりを、少年の手からでなければ飲まないようになりまし
た。また、なにかものをいおうとでもしているように、いくど
もいくども、むりにくちびるを動かそうとしました。それが、
ときにはいかにもはつきりとしましたので、少年は希望にカづ
けられながら、いきなり病人のうでをつかんで、

「おとうさん、しつかりするんですよ。しつかりするんですよ。
もうすこしのあいだですから。」
と、いってカづけました。

(三)

その日の午後四時ごろでした。ちようど、少年がそういうほ
かない希望をもって、いっしんに看護していたときでした。そ
のへやのすぐそばの、ドアのそとに足音がきこえて、やがて、
「さようなら、看護婦さん。」という声がきこえました。少年は、
思わずはつとびあがりました。のどまででかけたさけびを、
じつとおさえながら。

みると、一方の手にあつくほうたいをしたひとりの男が、看
護婦に送られながら、そのへやにはいつてきました。

少年は、するどいさけびをあげて、その場に立ちすくみまし
た。男はみまわして、ひと目少年をみると、こんどはかれがさ

けびを発しました。

「チチロ。」

男はそういって、少年の方へとんできました。

少年は、父親のうでの中にたおれましたが、胸がせまつて息もつけませんでした。

看護婦や、看護人や、助手がかけよってきました。

少年は、まだ声をだすことができませんでした。

「おお、チチロ。」



と、父親は、じつと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にほおずりしてからいきました。

「チチロ、これはいったいどうしたのだ。おまえはべつの人のところへつれていかれたのだな。わたしはまた、おかあさんから、「チチロをやりました。」って手紙がきたきり、おまえがないから、どんなにがっかりしていたかわからないよ。これチチロ。いく日おまえはここにいたのだね。どうしてこんなまちがいがおこったのだろう。わたしは、これこのとおり、すっかりじょうぶになったよ。それで、おかあさんはどうしているの。それから、コンセテラは、それから、あかんぼうは——みんなどうしている。わたしは、いま退院するところだ。さあ、いこう。まあ、ほんとうに思いがけないこともあ

るものだ。

少年は二こと三ことことばをはさんで、家族のようすを話そうとしましたが、

「ほんとうに、ぼく、うれしい。」

とだけ、やっといいました。

「さあ、いこう。晩には家に着けるから。」

父親は、少年を自分の方へひっぱりました。

少年はふり返って、病人の方をみました。

「さあ、いくのか、いかないのかね。」

と、父親はあきれうながしました。

少年は、また、病人の方をながめました。病人は、そのとき、

目を開いて、じっと少年をみつめました。

すると、少年のたましいのそこから、どつとことばがほとばしりてきました。

「いいえ、おとうさん。待ってください。ぼく、いけないんです。ここにあのおじさんがいます。ぼく、ここに五日のあいだいました。おじさんは、いつでもぼくをみています。ぼく、あの人におくすりを飲ませてあげるので。いつも、ぼくがそばにいないといけないのです。あの人、いま、ひどくわるいんですから、ゆるしてください。ぼく、とても思いきれないんです。ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにいさせてください。ほら、あんなにぼくをみています。どうか、ここにいさせてください。ねえ、おとうさん。」

父親は、じっと少年をみつめていましたが、やがてまた、病

入の方をみました。

「だれですか、あの方は。」

と、父親はたずねました。

「あなたと同じように、いなかのかたですがね。」

と、看護人が答えました。

「やはり外国から帰ったばかりで、ちょうどあなたが入院したと同じ日に、入院したんです。ここへつれてきたときには、もうすっかりわけがわからなくなっていて、口もきけなかったのですよ。たぶん、遠いところに家族があるのでしよう。どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、自分のむすこだと思ひこんでいるようですよ。」
病人は、やはりじつと少年の方をみていました。

父親はチチロにいました。

「じゃあ、ここにおいで。」

「もういくらもいなくてもいいでしょう。」

と、また、看護人が小声でいきました。

「わたしは、これからすぐにうちへ帰って、おかあさんを安心させてあげよう。じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにきなさい。さようなら。じきまたあえるね。」
父親はそういつててていきました。

(四)

少年がベッドのそばのもとの場所に帰ると、病人はほっとしたようにみえました。で、チチロはまた看護をはじめました。

その熱心とそのしんぼう強さとは、まえとすこしもかわりませんでした。チチロはまた、病人に飲み物を飲ませたり、ふとんをなおしたり、手をさすったり、やさしく話しかけたり、しつかりするようにはげましたりしました。その日も、その晩も、ずっとつきそっていました。そのつぎの日も、一日ずっとそばにいました。しかし、病人はますますわるくなるばかりでした。顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ困難になりました。夕がたの回しんどのときに、医者は、「今夜はもうだめかもしれない」といいました。そこで、チチロは、いよいよよくせわをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。病人はしげしげと少年をみつめながら、ときどきむりにくちびるを動かして、なにかものをいいたげにしました。また、やさしい色が

その目にうかぶこともありませんでしたが、それも、だんだん小さく、しだいに暗くなっていきました。

その晩、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもっていました。あかつきの光が窓から白くさしこんできたとき、医者が、看護婦と看護人をつれてはいってきました。

「いよいよりんじゆうだ。」
と、医者はいいました。

少年は病人の手をにぎりました。病人は、目を開いて少年をじつとみて、そうして、また目を閉じました。

そのとき、少年は、病人が自分の手をにぎりしめたような気がしました。

「ぼくの手をにぎった。」

と、少年はさけびました。

医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、やがてからだをまっすぐに立てました。看護婦が十字かぞうをかべからはずしました。

「死んでしまった。」

と、少年はさけびました。

「さあ、お帰り。」

と、医者はいきました。

「きみの看病はすんだ。帰ってしあわせにおくらし。ほんとうに感心な子だ。神さまがきみをまもってくださるだろう。さようなら。」

そのうちに、ちよつとわきのほうにいつていた看護婦が、小

さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取ってきました。そうして、それを少年に渡しながらいいました。

「ほかにないものがあるかもしれません。これを病院の記念に持っていらっしゃい。」

「ありがとうございます。」

と、少年はいつて、一方の手で花たばを取りながら、一方の手で目をふきました。

「だけど、ぼく、遠い道を歩い



ていくんですから、しぼんでしまいます。
そういつて、すみれをベッド
の上にちらしながら、

「ぼく、記念に、この死んだ人
にのこしていきます。看護婦
さんありがとうございます。お医者さん
ありがとうございます。」

そこで死人の方へ向いて、
「さようなら。」

といつて、名をなんと呼ぼうかと思っ
ているうち、五日のあいだ呼びな
れていた名が、しぜんと口にのぼ
ってきました。

「さようなら、おとうさん。」

そういつて、少年は、その小さな
着物の包みを小わきにかか
えました。

夜は明けかけていました。



國語 第五学年 中
 Approved by Ministry of Education
 (Date Apr. 2, 1948)

昭和二十二年七月五日翻刻発行
 昭和二十三年四月二日修正印刷
 昭和二十三年四月二十五日修正発行
 (昭和二十三年四月二日 文部省検査済)

著作権所有

著作兼発行者

文 部 省

省

翻刻発行
 印刷者

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

印刷所

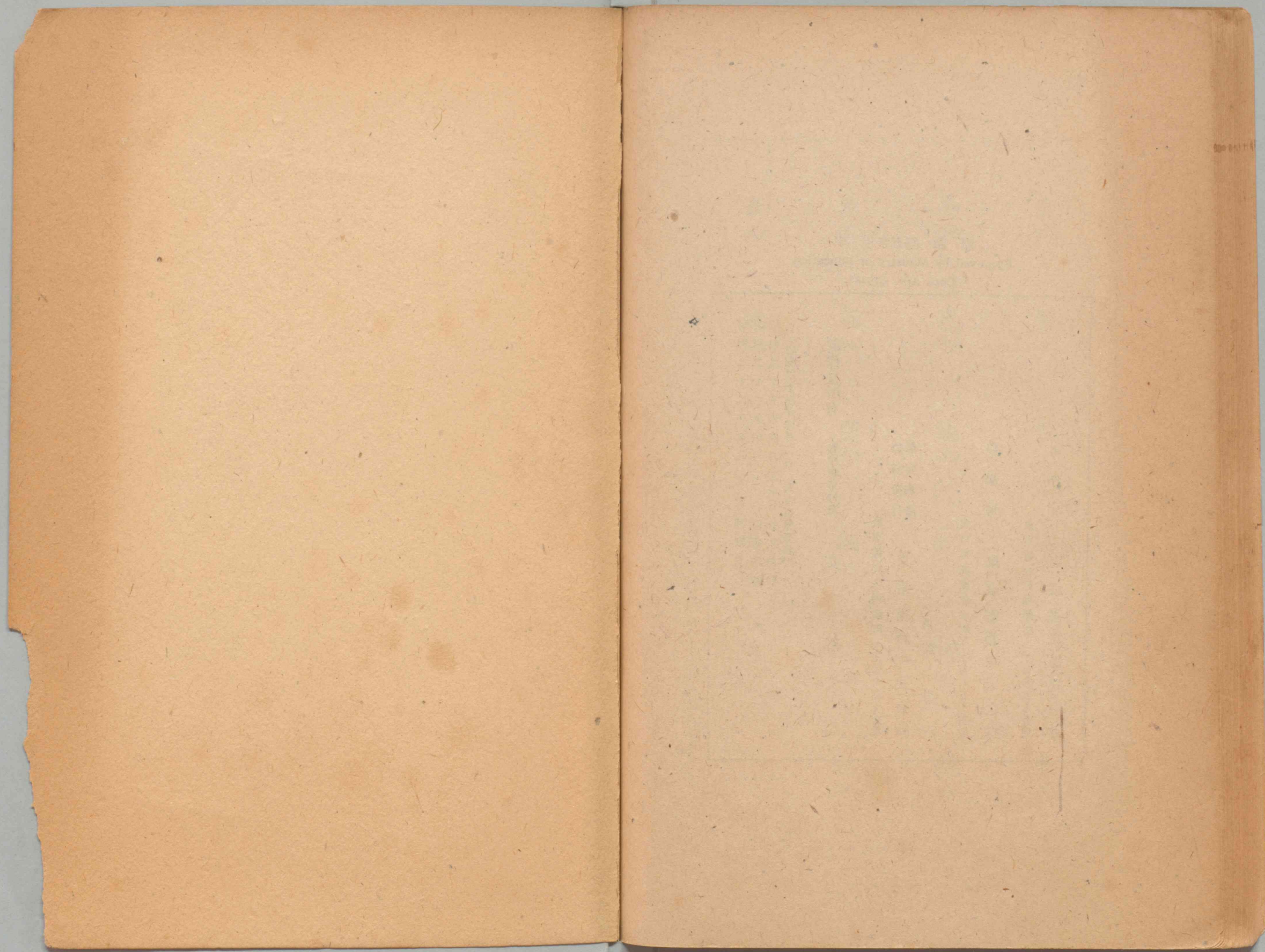
東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

発行所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

去 (63)	豊 (38)	働 (19)	練 (5)
陸 (54)	総 (44)	代 (19)	習 (5)
医 (71)	留 (51)	続 (27)	賛 (5)
最 (71)	謝 (54)	紅 (30)	調 (7)
希 (72)	得 (58)	梅 (30)	令 (8)
	包 (63)	照 (33)	清 (16)

○でつづんだかん字は、「とう用かん字別表」(教育かん字)にはいっていないかん字です。



広島大学図書

0130449583

